

2017年「胃と腸」賞は梅野淳嗣氏ら 「非特異性多発性小腸潰瘍症/CEASの臨床像と鑑別診断」 (52巻11号)が受賞

2018年9月19日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、2017年「胃と腸」賞の授賞式が行われ、梅野淳嗣氏(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)らが発表した「非特異性多発性小腸潰瘍症/CEASの臨床像と鑑別診断」(「胃と腸」52巻11号:1411-1422頁)が受賞した。

新生『胃と腸』賞

雑誌『胃と腸』はこれまで、1995年に創設された白壁賞と、1976年に創設された村上記念『胃と腸』賞(1981年までは『胃と腸』賞と呼称)という2つの賞を設けており、白壁賞は“消化管の形態診断学の進歩・普及に貢献した研究”に、また村上記念『胃と腸』賞は“消化器疾患の病態解明に寄与した研究”に贈られていた。本年度より2つの賞を統合して“『胃と腸』賞”として新たに発足した。

2017年「胃と腸」賞

2017年「胃と腸」賞の受賞者代表として梅野淳嗣氏(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)が紹介された。続いて、「胃と腸」編集委員長の松本主之氏(岩手医科大学医学部内科学講座消化器内科消化管分野)より祝辞とともに、賞状と楯が贈呈された。

『胃と腸』賞は、その年に『胃と腸』誌に掲載された論文の中から、特に消化管の形態診断学・治療の進歩と普及および病態解明に寄与した優れた研究であり、原則として原著形式の論文に対して贈られる。今回は2017年発行の「胃と腸」に掲載された対象論文155本について、「胃と腸」編集委員会で厳正な審査を行い、決定した。

今回の受賞論文は、梅野氏らが、遺伝学的に確定診断された非特異性多発性小腸潰瘍症(CEAS)45例の臨床像を検討したものである。その結果、本症は、患者背景や臨床所見として、女性に多く、貧血は必発するが肉眼的血便はほぼみられず、炎症所見は比較的低値にとどまり、約30%に血族結婚を認めることが確認され、小腸病変の形態学的特徴として、終末回腸を除く回腸を中心に、輪走ないし斜走する比較的浅い開放性潰瘍が腸間膜付着側と無関係に多発し、性別による比較では、胃病変は女性に有意に多く、ばち指、骨膜症



▲ 2017年「胃と腸」賞を受賞した梅野淳嗣氏

や皮膚肥厚といった肥厚性皮膚骨膜症の所見は男性に有意に多かった、と報告しており、本症の診断に際しては、小腸病変の評価に加えて、上部消化管病変や消化管外徴候の評価、既報の *SLCO2A1* 遺伝子変異の検索も必須と考えられたと結論している。

受賞者挨拶で梅野氏は、“本日は名誉ある『胃と腸』賞を受賞することができ、誠にありがとうございます。共著者の先生方、研究に協力して下さった先生方、論文執筆をご指導くださいました江崎先生、松本先生に心より感謝を申し上げます。当教室の岡部治弥先生が初めて非特異性多発性小腸潰瘍症という疾患概念を発表されてから約50年が経過しています。長い年月の間に多くの症例が集積され、2012年に松本先生が遺伝性疾患であることを明らかにされ、2015年にプロスタグランジンのトランスポーター遺伝子である *SLCO2A1* 遺伝子の変異が本症の原因だということが判明しました。しかし、病態に関してはいまだ明らかになっておらず、今後も努力を重ね、治療法につながる新知見を発見したいと考えています”と述べた。

その後、梅野氏から受賞論文のレビューがなされ、最後に改めて会場から賞賛の拍手が送られ、授賞式は終了した。